

列座ノ面々又盃ヲメグラサル、刺刀脇指銘ノ物數ヲツクシ取出サレ、大身小身ソレトニアタ
 へ被下ケレバ、各忝奉存候由、悦ビ合テ退出シケリ、

〔信長公記 十一〕天正六年正月朔日、五畿内泉州越州尾濃江勢州隣國之面々等、安土にて各御出仕、
 御禮在之、先朝之御茶十二人に被下、御座敷右勝手六疊布四尺縁、御人數之事、中將信忠卿、二
 位法印、林佐渡守、瀧川左近、永岡兵部大輔、惟任日向守、荒木攝津守、長谷川與次、羽柴筑前、惟住五郎
 左衛門、市橋九郎右衛門、長谷川宗仁、以上、御飾之次第、御床に岸の御繪東に松嶋、西に三日月
 四方盆、萬歲大海、水さしかへり花、周光茶碗、圍爐裏に御釜うば口くさりにて、花入筒也、御茶道宮
 内卿法印、以上、御茶過候て各御出仕有、三獻にて御盃御拜領、御酌矢部善七郎、大津傳十郎、大塚
 又一、青山虎、其後御殿御座所迄皆見せさせられ、三國の名所を狩野永徳に被仰付、濃繪に被移、色
 色御名物はせ集り、心も詞も及ばれず、御威光中々不可勝計、各此御座敷へ被召上、悉へ御糟煮并
 唐物之御菓子色々被下、生前之思出、末代の物語、忝次第不申足、

〔信長公記 十三〕天正八年正月朔日、近年攝州表各在番粉骨に付て、年頭之御禮、舊冬より御觸にて
 御免、御出仕無之、

〔信長公記 十四〕天正九年正月朔日、他國衆之御出仕被成、御免、安土に在之御馬廻衆計、西之御門よ
 り東之御門へ被成、御通可有御覽之旨、上意に而各其覺悟仕候處、夜中より已刻迄、雨降、御出仕無
 之、

〔信長公記 十五〕天正十年正月朔日、隣國之大名小名御連枝之御衆、各在安土候て御出仕有、百々之
 橋より總見寺へ被成、御上生便敷群集にて、高山へ積上たる築垣を踏くづし、石と人と一ツに成
 てくづれ落て、死人も有、手負は數人不知員、刀持之若黨共は刀を失ひ、迷惑したる者多し、一番御
 先御一門之御衆也、二番他國衆、三番在安土衆、今度は大名小名によらず、御禮錢百文ツ、自身持